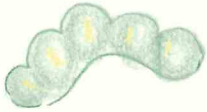


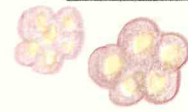


つばさ

多摩市立聖ヶ丘小学校
特別支援教室 つばさ
令和7年1月15日
つばさだより 第12号



「不確か」の中で



2025年（令和7年）がスタートしました。本年もよろしくお願いします。新年、いくつかのメディアを眺めていて印象に残った言葉は「不確か」というものでした。これは混迷が続く世界情勢や気候変動、国内においても安心や安全を脅かすようなニュースの多さに象徴されているものなのだと思います。普段私達の周りには「確か」であることの方が少ないと頭では理解しているつもりでも、より目につく大きな「不確か」が私達の気持ちのとなりにすぐにあって、心配も大きくなるのだと感じました。ただ同時に、明快な答えが出ないことの多い日々であるからこそ「考えていく・思考していく」ことを続ける大切さについても意識していくことが大事であることについて、昨年1月の通信でも紹介した「ネガティブ・ケイパビリティ」という言葉を思い出しました。（「解なき今を照らすために・答えを急がない力」の新聞記事の中で作家・精神科医でもある帯木達生（ははきぎ・ほうせい）先生が紹介された言葉。帯木先生は記事の中でこの言葉の意味を「答えの出ない事態に耐える力・答えが出なくても問題に挑み続ける力」として紹介されていました。これは、これだけ多くの情報や情報のやり取りの機会に囲まれていながらも、「正解」となるものが見えにくい社会。私達の「生活」や「子供たちの成長」にも当然多く当てはまることなのかもしれません。「すぐに答えの出ない事態や問題（不確か）が常に私達のとなりにある。しかし、その状況に対して焦らず、じっくり取り組み続けていく「力」をみんなで考えていきたい。」そんなことを思う年の始まりでした。

「聞く」という時間の大切さ

子供たちが「先生や友達の話聞く」という場面が学校生活の中ではたくさんありますが、今回紹介していきたいのは、大人が「子供の話聞く」という場面です。小集団指導の中にも「テーマトーク」等の場面を通して、テーマに沿って自分の話をするがありますが、多くの子に感じるのは話したいことが本当にたくさんあるんだなと思うことです。先日、「冬休み」をテーマにみんなで話した際にも年末に見たテレビや映画、ゲーム、偶然手に入れることのできたトレーディングカード、など様々な話が出てきました。「聞いて！聞いて！」という思いの中には、「伝えたい。共感してもらいたい。」という気持ちもたくさんあるのだと思います。ただ、私達大人としては、日々こうした話にゆっくり耳を傾けているか。というのも自問してしまうところです。加えて子供の話聞きながら「答え」や「正論」をメインに伝えすぎてはいないかという反省も頭をかすめます。

以前、子供の発達をテーマにしたある大学の名誉教授が行った講演の中で、高校を卒業してからも安定している子は中学時代に自分の話をだまって聞いてくれる人（この相手は大人であり、誰でも構わないとのこと。）と出会っているというものがありませんでした。また、加えて今の子供たちは否定も肯定も励ましも注意も指導も叱責もなく淡々と話を聞いてもらうという状況を経験していないことから、その分「相手に話を聞いてもらう」という経験は、自分の気持ちに寄り添ってもらえているという思いにつながる大切な経験であると話されていました。日々多くのことを学校生活でも「勉強」していく子供たちですが、その心の土台となるのは当の子供たちの「話を聞く」ということということに改めて気が付かされた話でした。当たり前のように難しくもある「聞く」という時間を意識して様々な場面で子供の声に耳を傾けていきたいと思いました。

